

まちづくり×ふくしミーティング vol.3 (第2回)



平成31年1月27日(日)に、大野東市民センターで、「もしもに備える地域のあり方」というテーマで、みんなが知りたいことをシェア(共有)できるミーティング第2回を開き、93人が参加しました。

予想を超えて多くの方々に参加いただき、とても寒い日でしたが、会場は参加された皆さんの活動への想いで、熱気に包まれました。



9:40～ Part1:キーノートスピーチ

竹田市社会福祉協議会 地域福祉課長 水野 匡也

各地の災害ボランティアセンターの運営や復興支援に関わる中で見てきた災害と日頃のつながりの関係について「私たちの地域が被災地になったとき」というタイトルでお話いただきました。時折、大分弁を交えながら、これまでのご経験から災害時に備えて日頃から意識しておくこと、取り組んでおくことなど、熱く、熱く語っていただきました。

●私がいろいろな被災地を回って気付いたことがあります。それは、地域の皆さんがちゃんとつながっていて、元気がいいところは、復興が早い、ということです。「まちづくり」×「ふくし」、私は社会福祉協議会で仕事をしていますが、福祉の専門ばかりやってもだめで、地域の皆さんが、どんな生活をしているのかを追い求めることを大事にしています。

●竹田市は、山と山の間にあるまちで、川が集まるところ。昔から水害に何度も遭っています。人口は約2万2千人、65歳以上の方が1万1千人います。約50%の高齢化率です。

●農業が盛んな地域で、稲刈りは地域で集まってやり、打ち上げをやっていました。打ち上げでは「あんたのところ母ちゃん、どうかね」といった話が出ていました。ところが、田植え機やコンバインが入ってくると、自分の家で完結するようになり、隣近所の人と会うことがなくなってきて、様子が分からなくなっていました。田んぼや畑に行くときは歩いて行き、出会った人に声をかけて話をしていたのに、今は車を使うので、あいさつ程度になってしまいました。携帯電話の普及も同じです。これらのことは、地域の中で個人が独立したのではなく、「孤立」したのだ、といつもお話させてもらっています。

●ここ何年間で環境がどんどん変化しているのが分かります。普段のつながりをどう作っていくか、ということにつながっていきます。これを意識的にやっていかないとイケません。だから、最近は、集いの場づくりをやっていきますね。

●人が動くときには3つの感覚が必要です。一つは「価値観」。相手にどう理解してもらうか。2つ目は「危機感」。今やっておかないとイケない、すぐやろう、と。3つ目は「達成感」。小さな成功体験をどう積み重ねていくか。少しずつ方向をリードして、気がついたら同じ方向を向いていた、こうなるためには、時間も手間もかかります。一人で頑張らないようにすることも大事です。



10:45～ Part2:参加型パネルディスカッション

広島市安芸区畑地区「畑賀あんしんネットワーク」と大野第八区の「MSK活動(身近な、見守り、支えあい、交流)」の取組をお聞きし、実践につながる具体的なヒントをたくさんいただきました。

畑賀地区社会福祉協議会 会長 中島 幸子さん から

○7月6日は、雨が非常によく降っていて、注意喚起の情報メールが頻繁に入っていました。「畑賀あんしんネットワーク」では連絡網を作っていて、地区の福祉委員がその要になっているので、まずは連絡をとり、要支援者へ避難を



呼びかけました。連絡が取れない人がいた場合は、担当の民生委員から連絡します。民生委員は情報を待ってから活動してもらうことになっています。

○要支援者も、支え手も、福祉委員も全て地域。受け手は一つです。避難支援、見守りの取組いずれも一本化しないと、区別してはできません。高齢者だけでなく障がいのある人など、日頃から見守りが必要な人を含めて、災害時にも対応できるシステムづくりを目指すことが最初の目標でした。

○このネットワークは、見守りの調整も行います。民生委員、老人クラブ、福祉委員が、週を分担して重層的な見守りができるようにしています。

八区ふれあい福祉の会 (大野第八区 区長) 横田 光男さん から

○福祉部会での見守り活動をしたほうがいいのではないか、という話からスタートしました。避難支援の取組の一環で、市から要支援者の名簿をもらうことになり、地区でそれをどう取扱うかという問題も出てきました。福祉部会だけでなく、区をあげてやってはどうか。そのほうが動きやすくなるのではということから「ふれあい福祉の会」を発足させました。

○「MSK活動」は、見守り、支えあい、交流、活動、それぞれの頭文字をとっています。まずは優しい見守り。私も民生委員をやっていますが、月に1～2回訪問しています。定期的な声かけや見守り活動、これをやらないと本当の福祉のまちづくりはできません。

○要支援者の支援は誰がするのか、これが一番の問題です。スタートの段階は、一人ひとりではなく組での支援というゆるやかな対応で始めています。



参加者からの質問 ～その1～

Q: 避難支援の途中でもし何かあって…責任問題に発展する可能性があるわけではないので、ちゃんと避難させることができる組織や教育がいるのではないのでしょうか。

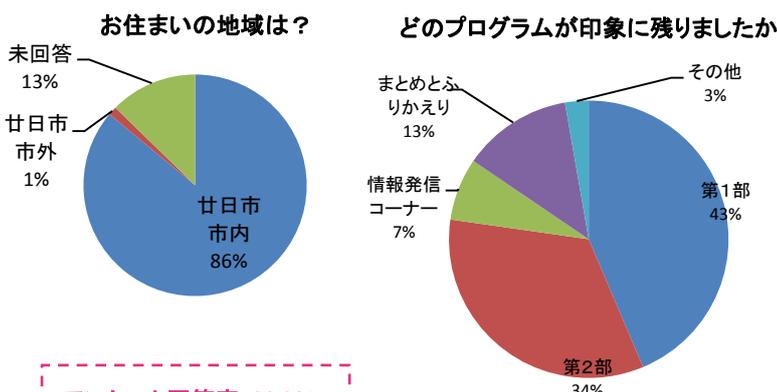
A: あくまでも自己判断でやってもらっていて、責任問題に発展するようなことまでは求めていません。あくまでも互助として、お互いに理解して欲しい、ということを常々言っています。災害時に、支援者がそこにいるかどうかもわからないし、責任を持つものではない。そういうことについての日頃の話し合いも必要ですね。

参加者からの質問 ～その2～

Q: 畑賀地区の福祉委員は、どういう役割ですか? 「あんしんネットワーク」は、日常的な活動の中では素晴らしい組織ですが、災害時はどう機能しましたか?

A: 福祉委員は、地域のニーズを把握して、解決に結び付けることを考えます。町内会長の推薦を受けて、畑賀地区社協から委嘱し、「あんしんネットワーク」や地域のサロンなどで活動します。災害時はネットワークを通じて、自分の担当以外の地域の人たちにも避難の声かけがされていました。縦横の連携もある程度取れていたようです。

～参加者の皆さんの「アンケート」から～



- 地域の防災は、向こう三軒両隣が助け合う気持ち大切。
- 価値観、危機感、達成感→人を動かす
- うまくいっていないのはなぜか、どんな状態か、客観的に判断し、手立てを考えることができそう。
- 自分の地区をちゃんと理解し、次の世代につなげる。
- 「行事+防災+交流」の事業を考えてみる。
- 自分の地域の組織と活動の見える化→住民に愛される地域づくりへ
- 古くから住んでいる人の話を記録にしたい。